

平成 21 年 6 月 24 日現在

研究種目：基盤研究（C）
 研究期間：2007～2008
 課題番号：19520275
 研究課題名（和文） アポリネールの美術評論から見た同時代の美術上の言説およびその変容に関する研究
 研究課題名（英文） Study on Apollinaire's art criticism and on the transition of contemporary art discourses
 研究代表者
 佐藤 文郎（SATO FUMIRO）
 京都嵯峨芸術大学・芸術学部・准教授
 研究者番号：30434773

研究成果の概要：我々は平成 19 年度から 20 年度までの 2 年間の研究期間を、19 世紀初頭フランス美術思潮に関する、出版活動に先立つ実証的な基礎調査期間と位置づけ、平成 19 年度は、研究資料収集等の研究環境整備に、平成 20 年度はアポリネール美術評論の翻訳作業の完遂と実証的調査に主眼を置き研究を推進してきた

その結果、翻訳の下訳作業は内容の整合、用語の統一等も含めてほぼ完了し、2 年間の研究期間における所定の研究目的に到達することができた。この成果をもとに、現在進行中の校注作業を経て、平成 22 年度中のアポリネール美術評論の全訳出版という中期的目標を達成できるものと考えている。

一方、もう一つの研究目的である実証研究のための基礎資料整備については、アポリネールの美術評論の翻訳・校注作業に必要な一定の成果を挙げることができたと考えている。また、フランス本国への 2 回にわたる渡航調査を通して本国研究者と研究方針に関する意見交換の機会を得、二カ国間研究としての体制を整えたことにより、今後日本におけるアポリネール研究を推進する上で大きな地歩を築き得たものとする。

今後はアポリネール研究に限らず、広くベル・エポック期の美術的言説を対象とした研究（平成 21～23 年度科学研究費補助金研究（基盤研究 C）「ベル・エポック期フランスの美術評論における「新精神」の形成と展開に関する研究」（課題番号：215203540001、研究代表者：佐藤））に研究を引き継ぎつつ、調査研究結果のさらなる精度向上と出版も含めた成果公表に努めていきたい。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	1,900,000	570,000	2,470,000
2008年度	1,500,000	450,000	1,950,000
年度			
年度			
年度			
総計	3,400,000	1,020,000	4,420,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・ヨーロッパ文学（英文学をのぞく）

キーワード：仏文学・美術評論・ベルエポック・アポリネール・前衛芸術

科学研究費補助金研究成果報告書

1. 研究開始当初の背景

本研究はアポリネールの美術評論を中心とした同時代の芸術思潮に関わる言説を直接の研究対象とし、当時生じつつあった美術界、画壇をめぐる新しい構図（従来の官展とアンデパンダン派の対立図式がどのように変容していったか、諸流派・グループやそれぞれの新しい芸術観がどのような段階・手続を経て組織されていったか、芸術家と美術批評家、画商、美術収集家との関係等）を精密に解析し、20世紀フランスの前衛芸術運動が組織化される過程を実証的に明らかにすることを最終的な目標としている。

フランスにおけるアポリネール美術評論を対象とした本格的な学術的研究は1970年代および80年代を通してピエール・ケゼルグ、ミシェル・デコダンが中心となってテキスト校訂作業が進められ、ようやく1990年代、プレイヤード版全集の3、4巻目として結実した。しかしながら、人名索引や基本的な書誌情報は記載されているものの、校注作業は未だ不十分であり、美術評論中で言及される人名や事跡等に関する資料が多くの場合欠けているなどの課題を指摘することができる。アポリネール美術評論においては、フランス本国においてもなおその端緒にあり、十全な形で実証研究がなされている状況とは言いがたい。

日本国内に至っては、アポリネール美術評論の翻訳出版さえほとんど行われていない状況である。幸いにして、近年アポリネール研究を専門にする研究者チームを組織できる状況が現出している。本研究の第一の意義は従って、こうした欠落（美術評論の未翻訳の問題）を補い、ベル・エポック期における美術的言説のよりバランスの取れた理解を目指す点、この時代の美術評論分野において旺盛な批評活動を展開したアポリネールに着目した点に見出される。

2. 研究の目的

アポリネールの美術評論研究に課せられた最大の課題は、研究結果をフランスにおいて刊行物の形で公表し、同時代の文学・美術に関する基礎研究をフランス本国と日本との連携の上で推進することにあるが、当面の目標（5年程度の中期的目標）は、国内においてこれまでほとんど顧みられることのないアポリネールの美術評論の全訳を刊行して認知度を向上させるとともに、国内における20世紀初頭の人文学研究全般に寄与することにある。

我々は2年間の研究期間を、国内外における公表・出版活動に向けた基礎調査期間と位置づけている。具体的には、研究期間終了までに、新たに収集した資料や獲得された新たな知見を発表する場を確保するとともに、この時代の美術評論研究に対する学術的関心を呼び起こし、研究推進への国内的コンセンサスを形成することをもって到達目標とした。

また、国内における研究の推進だけではなく、フランス本国の研究者との緊密な連携体制を構築し、両国の協力の下でより信頼に足る研究成果を上げるための条件整備も同時に目指すこととした。

3. 研究の方法

本研究の特色は、原則的に美術評論において言及される作品を全て同定する、言及される人物についても事績・業績を精査するという実証性の徹底にある。国内において資料収集ができない場合には、現地における直接調査を行う。

アポリネールが活躍した時代文化に対しては、従来の美術史的言説に加えて、近年、万国博覧会の意義・影響や建築・工業デザイン、商業広告の発達等の表象文化に関わる言説が盛んになされるようになってきている。しかしながら、こうした議論を本来下支えすべき信頼でき、かつ、万人が共有できる資料が整備されているわけではなく、個々の論者は手元にある個別の資料をもとに論じるという状況が続いている。特に、美術評論に関する実証的研究が日本国内はもとよりフランス本国においてもほぼ欠落した状況にある。本研究はアポリネールや同時代の美術評論を研究対象とすることで、まずこの課題に対処する方針を立て、来るべき議論の共通基盤を整備することとした。

また、美術評論の翻訳がほとんど行われていないという国内事情も考慮し、実証研究の成果をまずは翻訳作業に連動させて推進する方法をとることとした。

4. 研究成果

我々はアポリネールの美術評論の全訳を刊行して国内における認知度を向上させることを当面の目標とし、平成19年度から20年度までの2年間の研究期間を、19世紀初頭フランス美術思潮に関する、出版活動に先立つ実証的な基礎調査期間と位置づけ、平成19年度は、研究遂行のために不可欠な研究環境整備に、平成20年度は翻訳作業の完遂と実

証的調査に主眼を置き研究を推進してきた。

その結果、実施計画に多少の遅延が生じたものの翻訳の下訳作業は内容の整合性の確認、用語の統一、誤訳等の相互チェック等も含めてほぼ完了し、2年間の研究期間における所定の研究目的に到達することができたと考えている。この成果をもとに、研究機関後も活動を継続して、現在進行中の校注作業を経て、平成21年度、あるいは、翌年度にはアポリネールの美術評論の全訳出版という中期的目標を達成できるものと考えている。また、この出版事業が本研究の成果を最終的かつ十全な形で公表する機会となるものと思われる。

一方、もう一つの研究目的である実証研究のための基礎資料整備については、アポリネールの美術評論の翻訳・校注作業に必要な基礎資料の整備に関して、さらには、アポリネールにとどまらず、広くベル・エポック期の美術的言説に対する実証研究の基礎資料整備も視野に入れつつ一定の成果を挙げることができた。

また、フランス本国への2回にわたる渡航調査によって、フランス国立図書館の資料調査を行い、国内の研究環境整備に一定の地歩を固めるかたわら、フランス本国のアポリネール研究者、特にパリ第3大学のダニエル・デルブレユ教授、パリ第12大学のローランス・カンパ准教授との意見交換を実現し、研究方針の擦り合わせ作業を通して両国の協力体制で美術評論の実証研究を推進すること、日本における翻訳全集出版に対してフランス側も協力体制をとること、近年中にフランス人研究者を日本に招聘し、本国におけるアポリネール研究の最新事情を公演回答を通して日本側に紹介するなど、二カ国間研究としての方針および研究体制を整えたことにより、今後日本におけるアポリネール研究を推進する上で大きな地歩を築き得たものと考えている。

今後は翻訳出版事業の仕上げ作業に努力を傾注するほか、アポリネール研究に限らず、広くベル・エポック期の美術的言説を対象とした研究(平成21~23年度科学研究費補助金研究(基盤研究C)「ベル・エポック期フランスの美術評論における「新精神」の形成と展開に関する研究」(課題番号:215203540001、研究代表者:佐藤))および、アポリネールの文芸評論を対象とした研究(平成21~23年度科学研究費補助金研究(基盤研究C)「アポリネールの文学批評から見たベル・エポック期におけるフランス・モダニズムの諸相」(研究代表者:伊勢晃))に研究を引き継ぎつつ、調査

研究のさらなる精度向上と成果公表に努めていきたい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計5件)

伊勢晃、アポリネールの散文作品における短い短編作品「虐殺された詩人」を中心に――、年報フランス研究(関西学院大学フランス学会)41号、

伊勢晃、アポリネールと文学批評(1)――雑誌 *Le Festin d'Esopo* を中心に――、年報フランス研究(関西学院大学フランス学会)42号、1-11頁、2008年、査読あり

森田いく子、Le Théâtre de Guillaume Apollinaire - Ses Rapports avec la culture populaire -、仏文研究(京都大学フランス語フランス文学研究会)39号、73-103頁、2008年、査読あり

辻野稔哉、アポリネールとメディア、フランス文学研究(東北大学フランス語フランス文学会)28号、28-40頁、2008年、査読なし

佐藤文郎、「アングル展」をめぐって『ラントランシジャン』紙におけるアポリネール美術評論への視点(1)、紀要(京都嵯峨芸術大学)34号、14-23頁、2009年、査読なし

〔学会発表〕(計1件)

伊勢晃、Le Rire comme facteur de désordre、20^e colloque international Guillaume Apollinaire、2007年8月30日、スタヴロキ修道院アポリネール博物館(ベルギー)

〔図書〕(計0件)

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

取得状況(計0件)

〔その他〕

なし

6. 研究組織

(1)研究代表者

佐藤 文郎 (SATO FUMIRO)

京都嵯峨芸術大学・芸術学部・准教授
研究者番号:30434773

(2)研究分担者

三好 郁朗 (MIYOSHI IKUO)

京都嵯峨芸術大学・芸術学部・教授
研究者番号:60047163

伊勢 晃 (ISE AKIRA)

京都教育大学・教育学部・准教授

研究者番号：00379059

伊藤 洋司 (ITO YOJI)

中央大学・経済学部・准教授

研究者番号：10384708

森田 いく子 (MORITA IKUKO)

同志社大学・言語文化教育研究センター・嘱託講師

研究者番号：50460697

(3)連携研究者

辻野 稔哉 (TSUJINO TOSHIYA)

秋田大学・教育文化学部・准教授

研究者番号：40312524